

『アセスメントの必要性』

～自分で決めるっていいな～

社会福祉法人 蓬莱会
生活介護事業所 てらら
主任 河野 薫
生活指導員 田村直美

1. はじめに

社会福祉法人蓬莱会てららは2013年に開所し、2014年8月に女性だけの生活介護事業所となる。当事業所では定員20名に対して27名が契約しており、1日あたり平均14名のご利用がある。主に自閉症スペクトラム、知的障害、ダウン症の方がご利用されている。

当事業所の活動については‘働く’をモットーに缶作業、外部委託作業（広告の折り込み・広告のポスティング・パソコン分解・カラーサンプル貼り・ウレタンカット・米袋のシール貼り）に加え、健康維持のために散歩やスポーツ、ダンス、余暇活動としてカラオケを提供している。個別活動も充実しており、手芸や創作に取り組む方もいる。また、豆まきや運動会、ハロウィンパーティー、クリスマス会を開催し季節の行事を提供している。

これからお伝えするMさんは2013年からご利用開始し、今年で11年目である。

2. Mさんプロフィール

氏名	Mさん
性別	女性
年齢	60代前半
障がい名	知的障がい（療育手帳B）
障がい支援区分	支援区分6
既往歴	てんかん発作、子宮体癌、再生不良性貧血、横紋筋融解症、左斜視 眼瞼下垂（視野狭窄あり）
特性・性格	○ADLはほぼ自立されている。トイレ介助が必要な場合もある。 ○来所時には、必ず挨拶もし、「今日もよろしくね」と優しい言葉がけもある。他者や職員と会話等のコミュニケーションを好まれる。簡単な文章であれば会話は可能であるが、自身の想いを伝えたい時にはうまく言えずに感情的になることもある。 ○眼瞼下垂により、左側が見えにくい。 ○余暇は70年代の女性アイドルの動画を見て、踊ることもある。 ○イベントも自ら参加し、楽しまれている。

3. 現在に至るまでの経緯

Mさんは、公立中学校の特殊学級を卒業後、自宅から通所施設の利用を開始する。1年後、通所施設を休まれることが多くなり在宅生活となる。2002年5月に同法人障害者支援施設に入所し、現在は同法人グループホームに移行し生活を送る。

2013年4月中旬より週1日、てらら利用開始。同年11月から週2日利用となる。2015年から本人の希望もあり、月～金曜日の週5日利用。同法人の他事業所で過ごすことも1つの選択肢として本人に提案。本人と話し合い2019年4月より生活介護事業所たんぽぽと併用しての利用となる。事業所が増えたことで、人との関わりも増え笑顔も多く見られた。その反面、自身の想いを伝えるのが得意ではないため、うまく伝わらない時には暴言も聞かれた。

4. 支援目的

上記のことから、本人に楽しく過ごしてもらうにはどうしたらよいのかと職員間で話し合う。Mさんの何をどこまで知っているのか、と話し合うが、「これはできると思う」「たぶん理解していると思う」という発言が多く聞かれた。Mさんが暴言を吐いてしまうときには、自身の想いを相手に伝えることができていない時である。Mさんが何をどこまで理解して、どのような方法で相手に伝えることができればよいのかと話し合いを深める。

この時期、活動選択がうまくできず感情的になることが多くあった。自身でやりたいことがあるが、職員にうまく伝えることができず暴言になる→うまく伝えられないのでやりたい活動にも参加できない、ということがあった。今回、このスケジュール選択に焦点を置き、アセスメントをとることになる。

5. アセスメント

bon ワークス西宮 評価キット A1 を使用し実施。

検査中は終始穏やかで離席もなく、落ち着いて取り組んでいた。冗談も交えながら、笑顔も見られていた。

(検査は3日間に分けて実施。)

評価キット結果

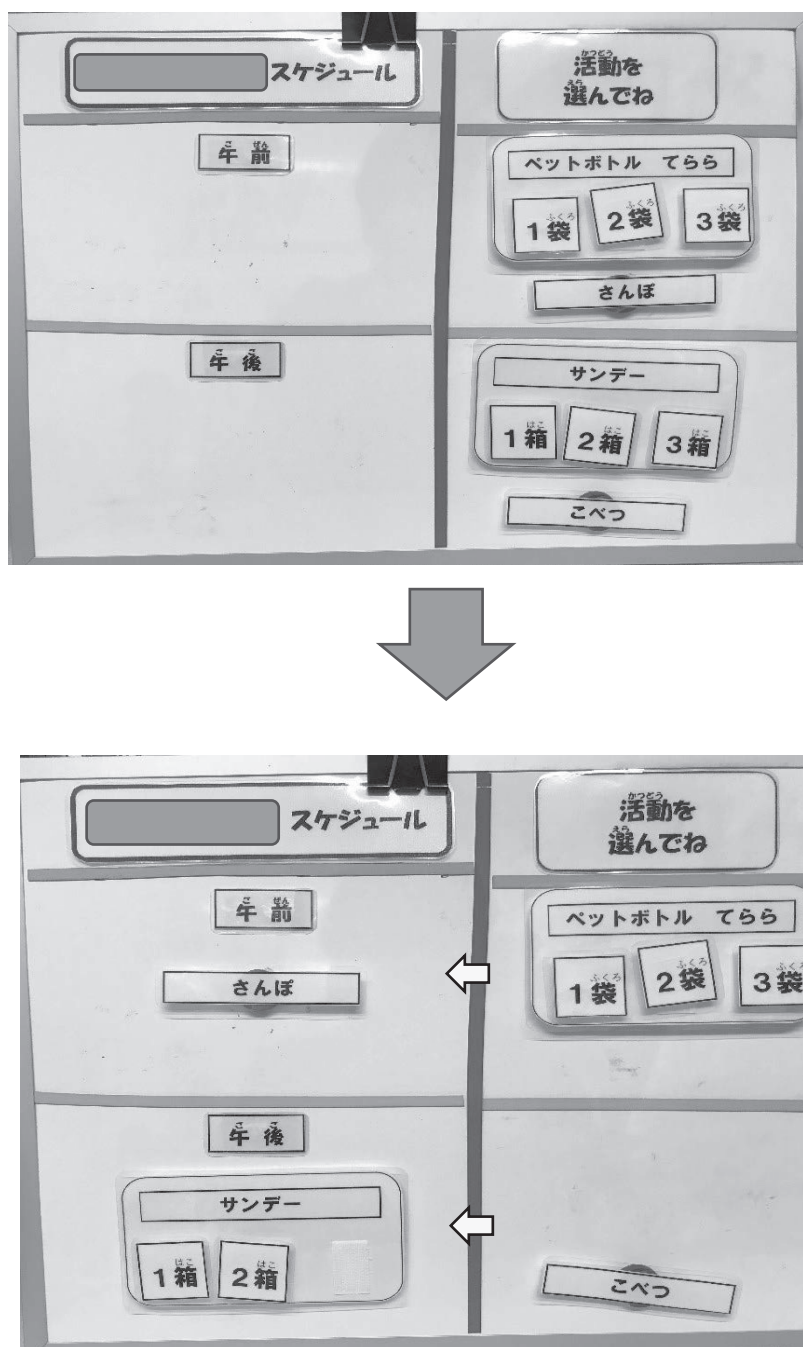
理解	<ul style="list-style-type: none">○簡単な単語のひらがなは読める。また、名称と文字・色・形も理解ができる。(コップ・ぼうし・○・□・色等の簡単な名称)○二語文～三語文の言語指示であれば理解できる○数字に関しても、1～10までの順番の理解は出来る。○標識マークと意味等の理解もできる。○時計、カレンダーの日常生活に困らない知識はある。
職業スキル	<ul style="list-style-type: none">○単純作業や、これまでの経験から行える作業等は問題なく取り組むことができる。○未経験、また道具を使用した作業、作業工程がいくつかあるも

	<p>のについては、構造化が必要。一度経験を積みばできる可能性が高い。</p> <p>○作業に取り組む姿勢においても、意欲的に取り組まれるが、基本的に作業は苦手な様子である。</p> <p>(見通しの立っている作業は、取り組むことができる。気持ちに波があり、分からない！やりたくない！などの気持ちがあると切り替えに時間を要す。)</p>
対人関係	<p>○全てのセッションにおいて、検査者と協力、意思疎通はできた。</p> <p>(本人が理解できていない時には、○○してください。と具体的な方法を伝える方がよい。)</p> <p>○検査者に対する不安や怒りもなく、とても穏やかにコミュニケーションがとれていた。</p> <p>(見通しのない待ち時間の時には表情が険しくなり、検査開始後も「(検査を)やりたくない」と否定的な態度もみられた)</p>
余暇	<p>○好きなアーティストの動画を視聴して過ごす。</p> <p>○タイマーが鳴ると自身で止めることは出来るが、場所移動に関しては職員の声かけが必要。</p>
コミュニケーション	<p>○口頭での指示も可能である。(二語文～三語文の言語指示の理解可能)しかし、年齢もあり記憶保持も低下していると思われる。</p> <p>○名前を呼ぶと元気に返事が出来る。</p>
持続性	<p>○1 時間に及ぶセッションも問題なく行うことができた。ただ、作業に関しては、集中力の継続は困難。</p>
構造化	<p>○眼瞼下垂がある為、日によって見え方が違う。(基本的には右側が見えている)</p> <p>○感覚刺激、音の刺激にも特に過敏になることもないため、個室の設置等は特に必要なく集団で活動参加可能。</p>

6. アセスメント結果より支援の組み立て

これまで全体スケジュールで活動予定を確認していたが、個別スケジュールボードを作成し活動選択をしてもらおう。眼瞼下垂があり、右目のの方が見えているため、右に注目がいくように活動選択を個別スケジュールボードの右側にし、選択した活動を左側に移動してもらおう。(写真2)

写真2 個別スケジュール



スケジュール提示は複雑化を避け、簡易的にする。活動内容が偏らないようにするため、午前・午後と分けて選択できるようにした。文字も単語表示シルビをつける。見通しがたつように、ペットボトル作業であれば3袋、サンデーであれば2箱と、どの程度の作業をすればよいのか分かるようにする。

スケジュールのマグネットにも工夫をし、取りやすいように厚みのあるマグネットを使用した。

7. 支援開始

Mさんは来所され、すぐに1日の活動を確認する。個別スケジュールボードを作成したことで、嬉しそうに選ぶ。最初は使用の仕方が分からず、職員が一度モデリングを行った。本人が何に注目しているのか、どこまで理解ができているのか等を観察し、個別スケジュールボードの理解ができていることを確認する。

作業は見通しがたつことで、表情が陰しくなることもなく取り組むことができおり、職員にも「散歩に行くね」「ペットボトル3袋やろうか」等話かけてくることも多くなった。

ただ、個別スケジュールボードを紐にぶら下げて提示していたため、ボードがクルクルと回ることがあった。そのことでMさんがイライラしている様子が見られた。作業が苦手という所見が出ていたように、両手を使いボードを使用することは難しい様子であったため、個別スケジュールボードを固定すると片手でも活動選択が可能となった。

8. 考察

今回、本人を支援していく中で、職員間で話し合うと「〇〇だと思う」「たぶん〇〇かな」と曖昧な発言があった。まずは正しくMさんを知るために、客観的データである評価キットを使用し、職員間で共有を行った。作業ができると思っていたMさんが苦手であったこと、この会話は理解していると思っていたが、理解ができていなかったこと、等数多くの発見があった。ただ、できないから止めておこうではなく、できるようにするためにはどのようにしたらよいかを考えた。評価キットを参考にし、Mさんを知ることで「〇〇の方法の方が分かりやすいね」「〇〇はどうですか？」と職員からも意見が出るようになり、職員が同じ方向を向いて支援を開始することができた。支援開始後も個別スケジュールボード活用方法や使いやすいように固定するなど、振り返りもできていた。

評価キットを行うことで、主観的な意見ではなく客観的データから支援を組み立てるということは職員間でも納得がいき、同じ気持ちで支援に臨むことができた。

9. まとめ

今回Mさんを再度アセスメントすることで、何ができて、どんなスキルがあるのか改めて知る機会となった。その中から、Mさんに合ったスケジュールを、どのように提示するか職員同士で話し合うことでよりよい支援につながった。そして、PDCAサイクルを実施することで問題が発生しても対応が早くにできていた。

個別スケジュールボードを見て「決めたよ」と笑顔で話しかけてくれるMさん。「これだけ作業するね」と言い、取り組まれているMさん。イライラすることも減り、「コロナがおさまったら温泉行きたいね」と雑談もしてくれる。

何年も通っているご利用者だから、この人のことは知っている！と自信過剰にならず、客観的データのアセスメントの大切さをMさんから学ぶことができた。

研究集録に協力してくれたMさんは、今日も活動選択をして「いってきます！」と散歩や作業に出かけている。その笑顔を見るとまた頑張ろうと職員も感じている。